

第2回歴史懇話会

講師：宮川寅二元放影研事務局総務課長（聞き手：寺本隆信業務執行理事）

日時：2013年12月13日（金） 15:00-16:10

場所：放影研広島研究所講堂および長崎研究所第4会議室（TV会議）

文中では敬称略

寺本：本日は、みなさんお集まりいただき、御礼申し上げます。

第2回歴史懇話会を開催する。第1回は長崎の岡本さんにお話をうかがった。今日は2回目ということで、広島の宮川さんに、寿命調査の開始(1958年)前後のを中心にお話をうかがいたいと思っている。

初めに、この歴史懇話会の目的についてお話しする。ABCC－放影研では66年間にわたり研究が行われ、寿命調査は放射線リスクの世界でゴールデンスタンダードと言われるほどである。ABCC－放影研の事業史や放射線リスクの科学史を残すことの重要性から、歴史資料管理委員会をつくった。今日の懇話会の前に開催した委員会では、歴史資料の保存および公開等のあり方について審議した。そういった実務と並行して、私達今の役員自身もABCC－放影研の歴史を学習することが重要で、OB・OGの方のお話を聞き、ABCC時代のことを知る機会を持つことにした。

宮川さんの経歴を紹介する。宮川さんは、1949年にABCCに入所、5年間印刷室に勤務した。その後、約1年間、ABCCを離れ、広島原爆資料館で勤務。1955年5月、統計部原爆記録課（現在の原簿管理課）主任として復帰、係長、課長補佐、課長へと昇任した。

1975年、放影研改組後に事務局総務課長に就任し、1989年に定年退職された。嘱託を経て、7年間、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の設立準備事業(厚生省委託)の事務長を務められた。現在は、広島放影研OB/OG会長を務められている。

はじめに、ABCCに入られた理由をおききたい。

宮川：終戦後、進駐軍で働いていたが、1947年頃になって失職した。その後、ABCC勤務（通訳）の日系2世の人にABCCを紹介された。1949年7月、(宇品の)ABCCを訪ねると、即勤務となり、印刷業務をまかされた。印刷業務は私1人で、ディトー(Ditto)という初期の複写機（青色印刷）が1台あり、各部の秘書から受取る原稿を必要枚数分刷っていた。印刷室を立ち上げることになり、1人の外国人とあちこち物色して回り、最終的に広（呉市）にあった元兵舎に決まった。

印刷室では、写真技師を含めて4、5名が採用され、オフセット機2台と大型紙断裁機を購入した。Photostatという大型の直接複写写真を利用した複写機もあった。広島研究所の各部から依頼を受けて、広の印刷室で印刷して各部へ届けるというシステムであった。

ところで、私が 49 年 7 月に宇品で挨拶にまわった際、部長級の人が数名不在だった。それは、新研究所建設の地鎮祭で、比治山に行っていたのであった。50 年頃、宇品から比治山へ移動が始まり、広の印刷室を建物が空いた宇品へ移動して、本格的な印刷室ができた。

最終的に比治山へ移動したときには、製図をするイラストレーターが 4、5 名、印刷担当者が 2 名、Photostat 担当者が 1 名、製版担当者が 1 名、その他補助担当者が 1 名ということで総勢 10 名前後となった。

寺本：(ABCC を一旦退職して) 1 年間の原爆資料館勤務はどうだったか。資料館は、広島市が設けたものだったのか。

宮川：当時、護国神社の入り口に鳥居だけが残っていて、その近くにあった公民館の隣の平屋に資料館があった。広さは放影研の講堂くらいであった。初代館長である長岡先生が、あちこちから被爆した瓦、石や瓶などを収集してきて、それらに手書きで被爆位置情報などの説明書きを付けて展示する施設であった。長岡先生の手伝いをしていた。

寺本：再度 ABCC に復帰、原簿記録課主任という仕事はどんなものであったのか。

宮川：ABCC が死亡率調査を開始するために採用した約 40 名の職員（ほとんど女性）に対して、講堂で、(資料整理のため) アルファベット、ヘボン式ローマ字や、アルファベット順の並べ方の教育をした。

寺本：1955 年に現在の寿命調査創設を求めるフランシス委員会の勧告がでたが、それ以前に死亡率調査—死亡診断書を利用した調査—が行われていたのか。

宮川：そうだ。短期間で死亡率調査を完成させるために昼夜 2 交代制シフトがとられ、60 年 1 月頃まで続いた。日勤は(月曜日から金曜日までの) 午前 8 時半から午後 4 時半、夜勤は、火曜日から金曜日の午後 4 時半から午後 10 時までと土曜日と日曜日の午前 8 時半から午後 5 時半までであった。

寺本：死亡率調査の作業はどのような内容であったか。

宮川：市役所から借りた死亡診断書の内容を写し取り、マスターファイル (MF) と照合してコード化などの処理をした。終戦直後の頃の死亡診断書は、現在の物とはまったくちがいが、荷札ほどの小さい紙やザラ紙のような粗末な紙に、医師が思い思いに診断名や症状などを記入していた。それでも死亡ということはわかり、死亡につながる病名がコードできたと思う。初期の死亡率調査では 1945 年までさかのぼって調査した。

寺本：55 年の秋頃に出たフランシス委員会の勧告の中に、死亡診断書調査は始まっていたが、それが十分ではないというような記述があったと思う。この勧告により、体系づけられた固定集団をつくり、追跡し、死亡届を収集する調査へと刷新されたということか。

宮川：そうだ。56年の初め、RQ (Radiation Questionnaire)やMQ (Migration Questionnaire)などの調査用紙があったが、統一した書式を作成することになり、各部からの要望をもとに私がデザイン案をつくり、3月頃にMSQ (Master Sample Questionnaire)が完成した。当時、(夜勤の主任の仕事は)勤務開始時の引き継ぎ業務が終わればすることがないので、作業者のいない夜間の印刷室でMSQのデザイン作業をした。

寺本：日勤と夜勤とは同じ仕事を同じような人数でしていたのか。

宮川：私は、夜勤だけではなく、作業の進行状況を把握し次の夜勤の職員に業務を指示するために日勤も出勤した。職員数は日勤の方が夜勤より少なかったが、ベテランが多くいて、その人たちは前日夜勤で作業した結果をチェックした。私はそのチェック結果の伝達を行った。

寺本：夜勤の職員が帰宅するとき、真っ暗の比治山をどのように降りていたのか。

宮川：比治山下交番方面や段原方面など、それぞれがグループでまとまって降りていた。同時間帯に帰宅する職員(守衛さん、補助業務者など)と一緒に降りた。まれに、解剖従事者が乗る公用車に便乗させてもらう人もいた。

寺本：ABCCには広島市の市民社会からいろいろな批判もあったようだが、職員としてこのような軋轢は感じていたか。

宮川：私自身は、調査対象者に接することはなかった。調査課ではMSQを使って調査していたが、軋轢の多い地区はベテラン調査員が担当していたようだ。調査員の中には訪問先で怖い目にあったり、ひどい言葉をかけられて調査を拒否されたりした者もいたそうだ。抗議のデモ隊(8月6日)が比治山の上まで来たことがあり、事前に勤務を休止する措置をとったこともある。

寺本：1975年放影研に改組され、日米共同運営となったことで変化はあったか。

宮川：特にはなかった。ABCC時代は、決め事があれば該当の部長が決裁して関係者に知らせるというシンプルなやり方をとっていたが、放影研になると、起案書による決裁で複雑になった。(私が)初めて起案書を作成したときは何もわからず困った。ABCC時代は、サイン決裁で、はんこは給与受け取りで月に1度使っただけだった。給与は新たな給与表が用いられたが、ABCC時代の額をもとに決められて特に変化はなかった。

勤務時間は午前8時半から4時半までであったが、事務局では、厚生省から4時半以降に連絡が入ることがあったため、5時すぎまで残っていたようだ。

寺本：アメリカ単独運営から、日米共同運営となり、社会的にはそれなりに評価の声はあ

ったか。

宮川：あったと思う。

寺本：歴史資料管理委員会委員として、資料の保存とか、資料の公開のあり方とかについて検討に加わっていただいているが、ABCCの記録の保存について、ご意見をいただきたい。

宮川：49年頃、「Central File」セクションがあり、そこには、3、4名のスタッフがいた。メールボーイが1日に2回各部を回り、「Central File」へ移動するファイルを回収していた。それらのファイルを内容により選別し、10種類以上もある色分けしたラベルをフォルダーに貼付して整理保存していた。比治山に移ったとき「Central File」セクションはなくなった。保存していたファイルは、各部へ返還されたようで、疫学統計部に「Central File」とスタンプが押された書類が残っていた。おそらく、各部に返還後は、部長が保存または廃棄の判断をしたのではないか。（私は）部長から資料の一部廃棄を指示され、広島県西方面の廃棄施設への持ち込みに立ち会ったことがある。資料はトラックで施設へ運ばれ、溶解処理された。

寺本：定年退職後、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の準備事業で、原爆に関わる記録の保存などに携わっておられた。

宮川：当時、7つか8つの小委員会があり、保存のあり方について審議された。被爆者のカルテを保存している病院なども訪ねた。

寺本：最後にABCC/放影研OB・OG会の会長として一言伺いたい。

宮川：毎年開催しているOB会も今年で27回を数えるが、年々参加者が減っている。職員の皆さんには、定年退職後OB会への参加をお願いしたい。

宮川氏による講演に引き続き、質問および回答があった。

質問：この研究所には、ABCC時代からコンタクターという職種があり、2年に1度の検査をお願いするという、非常にユニークなシステムがある。このシステムについては、ミシガン大学の故James Neel先生も非常に感心しておられた。それについて、何か感想はあるか。

宮川：市内に置いた5-6カ所の出張所を拠点にして、コンタクターは自転車で訪問業務をおこなっていた。自転車の少ない時代に、ABCCは業務用自転車を100台近く購入した。また、対象者が来所の際は、ジープでお迎えにあがっていた。お金をかけたことが、調査がうまくいった理由のひとつだったのではないかと思う。元警官や元憲兵のコンタク

ターがいて威圧的な勧誘をしたという話をきいたことがある。ただ、そのような方針違反がみつかれば、部長の権限で即刻解雇されるという、(当時の ABCC には) 非常に厳しい労働条件もあった。

寺本：宮川さん、今日は貴重なお話をどうもありがとうございました。これからもお元気で、歴史資料の問題についてご指導いただきたいと思います。(拍手)

以上